

ワクチン1万回 涙の軌跡

地域医療の最前線で 1

現場へ！

ワクチン接種に来たら、いきなりくす玉が割られ、紅白まんじゅうを渡されるなんて、思ってもみなかったに違いない。

部にある社会医療法人関愛会・坂ノ市病院。累計1万回目の「ラッキーボーイ」となった中学1年生男子は、はにかみながらカメラに向かってポーズをとった。シャッターを切ったのは、研修中の私(55)である。

坂ノ市病院はコロナで痛目にあっている。大分県内で初の感染確認からわずか半月の2020年3月。急性期患者を診る近くの国立病院機構大分医療センターでクラスターが発生。感染に気づかないまま、坂

か」と院長の管聡(52)。来院が難しい老人ホームの入居者への巡回接種にも取り組んだ。

ノ市病院が1人、同じ関愛会の佐賀関病院が2人の転院を受け入れていたのだ。両病院とも、急性期の治療を終えた患者の体調を回復させ、家に戻るようにする機能を担っている。

国内でまだ珍しかった病院クラスター発生が、地域に与えた波紋は大きかった。

「保育園から子どもを登園させないと言われた」。坂ノ市病院の事務長だった高橋勝(48)のもとに、職員からこんな内容

の相談が次々と舞い込んだ。職員が出勤できず業務に支障が出かねない。そんな心配と「社会から排除されている」という感覚に悪寒が走った。

保育園からの自粛要請は、大分東医師会長の澤口博人(60)の耳にも届いた。「感染の恐怖と闘う病院が世間から冷たい目にさらされている」。小児科医の澤口は、行政に対策を働きかけた。また、感染者が出た各病院にヒアリングに行き、不足していた消毒液やマスクなどの調達も支援した。

初、良くなかったからだ。病院の前身であるクリニックを開設した約10年前、あいさつに回った近隣の開業医たちからは「患者が取られるのでは」と警戒心をあらわにされた。

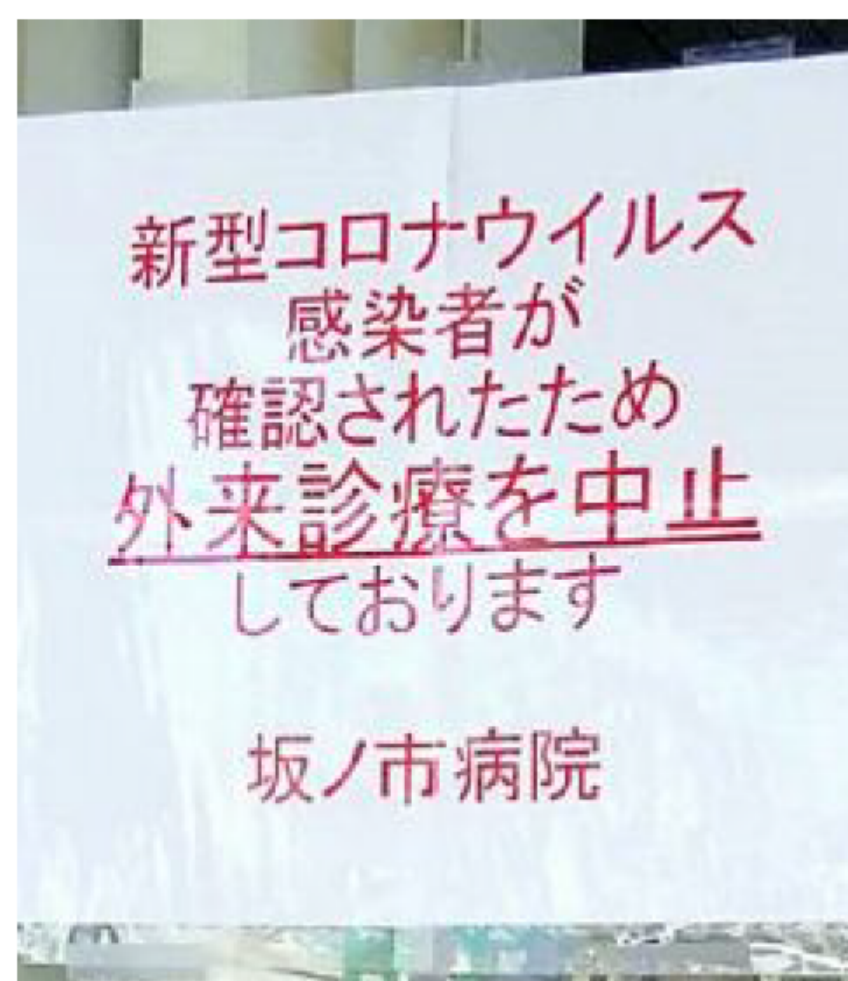
院長の管は医師会に小まめに顔を見せて融和に努めた。一方で、夜間や休日の対応があるため、他の医療機関がなかなか手を出さない訪問診療に取り組み、信頼を築いていった。

6年前に澤口が医師会長になってから関係は改善に向かった。「決定的だったのはコロナ対応。発熱した患者さんを診察し、ワクチン接種を休日返上で続けた坂ノ市病院への視線は変わった」と澤口。

「私たちの病院とは補い合う関係にある」と、大分医療センター院長の奈須伸吉(63)は話す。感染者を転院させてしまっただけは不幸だったが、病院同士が連携して患者を治療しなければ、地域の医療は守れない。

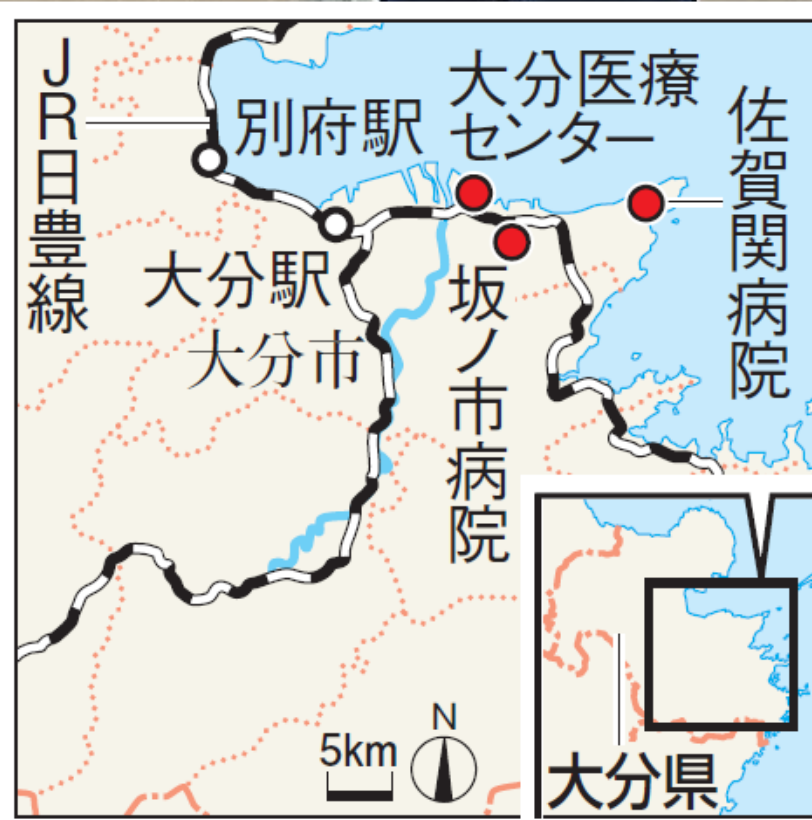
「この法人の取り組みは面白いよ」。取材先の研究者からこう紹介された大分県の社会医療法人関愛会で、私は1年間、会社の「自己充実休職」を利用し、無給の研修生として過ごした。地域医療の現場で肌で感じたことを報告する。 敬称略

ワクチン接種1万人目となった中学1年生と一緒に祝いする坂ノ市病院の管聡院長＝2021年10月、いずれも大分市



外来と入退院を2週間中止した＝2020年3月

大分東医師会長の澤口博人・大在こどもクリニック院長は、大の「鬼滅の刃」ファン



「涙が出るほどうれしかった」。事務長の高橋が、澤口の動きをこう振り返るのは、坂ノ市病院と地元医師会の関係が当